

登呂遺跡に見る記録写真と大場磐雄

中野 宥(静岡市登呂博物館)

はじめに

登呂遺跡の調査にはさまざまな研究者が関わっておられ、その中の幾人かの先生から調査に関するお話を伺う機会がありました。気が付きましたのは、登呂遺跡が見つかって、応急的な調査が行われ、その後本格的な調査が実施されるといった一連の動きは既に明白なものとなっていると思われていました。ところが調べてみますと、実は曖昧な理解でしかなかったということがわかりました。そこで、登呂遺跡の発見から史跡整備にいたる顛末を物語る資料、あるいは記念的資料を探索し、登呂遺跡の歩んできた道を知ることができないだろうかと思った訳です。この作業の中で感じたことは、登呂遺跡は他の遺跡にはない特別な意味を持っている、ということでした。

一つはいうまでもなく考古学上の特徴で、弥生時代後期の米づくりのムラを表現するのに適当な史料価値を認めることができます。あと一つは現代史上の特徴で、学史上の価値を持っているということがいえるようです。第二次世界大戦における、戦局悪化による工場疎開を契機とした登呂遺跡発見と軍事機密エリアの中で行われた発掘調査という状況は、戦争という事態にはならなかった、あるいは有利な戦局展開という事態だったら、ありえなかったことになり、戦後の本格的調査も実施されることもなかったでしょう。

1. 登呂遺跡の発掘調査

戦後の昭和 22(1947)年から行われた本格的な発掘調査は、敗戦という結果の中で実施された訳ですが、当時の社会は、食糧を始めとする諸物資の欠乏、精神的価値観の崩壊、将来に対する不安といった情勢下でありました。

登呂遺跡発見の第一報を世に送った元毎日新聞社の森豊先生にお聞きした話ですと、敗戦という当時の時局柄「登呂遺跡の発掘調査」などとても口に出せる社会の状況で無かったそうです。一方では、平和国家日本・文化国家日本の建設を標榜する社会の動きが生まれ、さらに皇国史観や閉鎖的調査・研究姿勢の反省もあって、歴史学界では、人文科学としての開かれた歴史学研究の第一歩を登呂遺跡発掘調査から進める事で、新しい日本の構築に貢献することになったという事です。

大塚初重先生もよく仰っておられることですが、登呂遺跡の発掘調査は「新しい日本考古学の夜明け」を指し示すものであり、その意味では現代考古学にとって登呂遺跡は、「日本考古学の回帰点」に位置付けられると考えられております。いわば登呂遺跡の発見から戦後の学際的総合調査に至る過程は、その時々々の社会情勢との関係を考えてみますと、実にタイムリーなものであったことがわかります。すなわち、発見・発掘調査という出来事は、「戦争」という情勢があって初めて成り立ったものと言えましょう。登呂遺跡の研究が戦後の新しい歴史学研究の出発点としての価値が認められたのは、昭和 18(1943)年の発見時の様子が鮮烈なものとして印象づけられたからでしょう。

2. 登呂遺跡研究の重要性

戦後の発掘調査に、当時旧制中学生による「古代史研究学徒会」会員として参加し、以来亡くなるまで登呂遺跡研究に携わってこられた、「登呂もっちゃん」こと望月董弘先生保管資料の中に、ガラス乾板を密着焼きした写真帳や、静岡県による発掘調査関係の書類がありました。いずれも昭和 18(1943)年の記録で、さらに八幡一郎先生や森豊先生、登呂の発見当初から尽力された安本博先生が

お持ちの資料の提供も受けました。これらの資料の内、写真資料を大場先生の『楽石雑筆』とつき合わせてみますと、大場先生が撮影された写真がかなりある事がわかりました。

昭和 18 年の発掘の時には、大場先生のほか調査主体の静岡県の手によって撮影された写真もあり、そのうちの幾つかは複数枚プリントされ、調査関係者に分けられたらしく重複して保存されたものも見受けられます。大場先生の撮影された写真は、大場先生が直接目にされた遺跡の光景ということになる訳です。

これらの写真の中から大場先生が撮影された写真は、『楽石雑筆』によって選別をすることが可能です。資料 1 のとおり調査に至る経過の表を用意しましたが、これに先生の行動を当てはめてみますと、大場先生がお見えになったのは発掘直前と、第一回目の発掘中ということになります。最も重要な時期においてになって写真で記録なさっている、ということがわかります。

最初に来られたのが 8 月 3 日のようなのですが、8 月 7 日に採集遺物、8 日に杭がたくさん露出した遺構の部分を撮影なさっておられます。発掘調査は 8 月 17 日から 29 日にかけて実施されているのですが、この間大場先生は 21 日から 24 日まで立ち会われておられます。この間の様子は『楽石雑筆』に記載されておりますが、その際先生が撮影された写真をすべての写真の中から選び出し、その撮影状況を知ろうとしました。ある程度の推測はできましたが、その度合いには自信がありません。

ここで写真映像の理解のために、昭和 18 年の遺跡発見・調査時の登呂遺跡の状況の把握が必要と思われるので、その概要をお話しておこうと思います。資料 2 として「軍需工場と登呂遺跡の位置」という図を用意しました。登呂遺跡は静岡平野南縁の海岸から約 2 km 程度内陸の水田地帯にありまして、ここに住友軽金属の航空機用プロペラ工場を建設することになりました。建設地の地固めとして東方の有度丘陵の掘削土を利用していました。図にあるトロッコの架線は、その時の掘削土を運搬するためのものです。戦局が風雲急を告げてくると、応急的に敷地南部の水田を削り最初の工場建設部分に盛土しました。その掘削地域で延々と続く木杭列や、大量の土器破片や木製品が出土し、遺跡の存在が認識されるようになったのです。

当時ここは時局柄工場の性格上、軍事機密性の高い地域でした。一般人が立ち入れる土地でもないし、調査なども考えられる状態ではありませんでしたが、在京の先生方や森豊先生たちのご尽力でかなり早い段階で発掘調査に漕ぎ着けることができました。憲兵隊とのやりとりなど、森先生から当時のエピソードを伺っております。

森先生が遺跡の存在を認識し新聞報道をしたのが 7 月 11 日、それに前後して安本博先生が在京の諸先生に連絡を取り、先生方のご視察が相次いだ訳です。そして 8 月の後半に発掘調査が開始されることとなりますが、その間は約一ヶ月半という短い時間でした。これには、一方で日本民族の優秀性を示すものとして戦争遂行上の思惑も軍部に働いたのではないかと、私は想像しております。

折りしも京都帝国大学より奈良県唐古遺跡の発掘調査報告書が上梓されたのですが、東国でも唐古遺跡に劣らないすごい遺跡が出たと認識されたのでした。昭和 15(1940)年に発生した「静岡大火」の復興事業のため復興局というのが設立されていまして、その局長だった阿倍喜之丞さんという方が、事の重大性を理解され、露出していた木杭列の位置を測量されました。この時の測量図が後に大変に役に立つ訳です。

阿倍局長は技術屋さんですが、古代史や古代文化に造詣があった方ですので、即座に測量による対応を思いつかれたのだと想像します。資料の 3 が「復興局測量図」ですが、平面測量は 7 月 15 日と 8 月 9 日から 12 日までの 2 回実施されております。この図はそのうち 7 月 15 日の測量図と思われます。登呂遺跡の全体図として広く使われております資料 4 の図は、畦畔護岸用の杭・矢板列を点線で表わしているのが水田跡になりますが、昭和 18 年の測量図が基になっています。資料 3 と少々様子が違ってあります。そこでこの図は、恐らく 2 回の測量のうちの早い方の図であろうと考えた訳です。

実は、遺跡は工場建設、終戦直後の再水田化によって破壊の手が及んでいたそうです。住居群のある地域は工場建設のための埋め立てが終了していましたが、水田跡地域はまだ埋め立てられておらず、終戦時には畦畔遺構が露出した状態でした。終戦による工場用地払い下げで再水田化されたのですが、露出した杭などは障害物として大半が撤去されてしまい、壊滅的打撃を受けていたそうです。当時の様子を知るお年寄りが、「杭や矢板は流木と同じでよく燃えたので燃料としてよく利用された」と、話してくれました。

戦後の総合学術調査では水田跡の中で、比較的畦畔遺構の残存状況が良さそうな場所を10ヶ所選んで、発掘をしております。従いまして、戦後の調査時には遺跡発見時のような水田跡の全体の様相を見ることは、不可能となっていました。ですから水田跡全体の理解には、昭和18年の測量図の解析が不可欠であることは申すまでもありません。

資料5は発掘調査報告書『登呂・本編』に掲載されている図で、私たちがよく目にする登呂遺跡全体図の原図となったものですが、大場先生が目になされた遺跡の状況は資料3のようだったろうと推測しています。この二つの測量図には、いくつかの不可解な構造を示す表現が見られます。最も理解に苦しむ構造が、中央水路と呼ばれている水路跡北端の取水口と推定される位置から30m程南に下がった地点に、複雑な構造を考えさせる杭列の表現となっております。具体的にどのような水路施設を想定してよいのか、全く手懸りがありません。

二つの測量図で示された中央水路の南半分の二重構造は、戦後の調査でもB地点・C地点において三条の畦畔状土盛りで挟まれた複式構造が確認されている訳ですが、昭和40(1965)年に実施されました東名高速道路建設に伴う事前調査では、単条の水路構造となっていて水路東側を画する畦畔状の土盛りは認められません。このような近接した調査地点での相違も未だ解釈されていません。

資料3の図ではさらに居住地域に相当する場所に、隅丸方形あるいは楕円形に点列で示された箇所があります。ここには「住居跡」と書かれていますが、昭和18年発掘の住居跡は1棟だけで、報告されている登呂遺跡全体図に照らして見ますと、第二礎板群の位置に相当します。ですから昭和18年発掘住居跡は、正式に報告されている位置と異なっているのかも知れません。

登呂遺跡史跡再整備の問題がここ10年程起ってきまして、本学卒業生の岡村涉さんを中心に5年程再発掘調査が行なわれております。このような相違の解決も目的の一つとされておりまして、本日のテーマからは外れると思いますが、新解釈を織り交ぜながら少し触れてみようと思います。

水田跡については、従来畦畔というものは木杭や矢板でしっかりと護岸されていることが普通であると考えられてきましたが、実はこれは登呂集落成立期からの構造的特徴でなく、洪水(終末のものではない)後の後半期に補強もしくは改修された結果のようです。洪水層に埋もれて水路跡なども上層の遺構と位置を違えずに認められますので、水田構造には変移のあったことがわかります。一部では小区画の手畦が確認されていて、大区画の中をさらに小規模に区画していたことがわかります。

居住地域では、従来12軒の住居と2棟の高床倉庫で成立した集落と教科書的に説明されてきましたが、そんな単純には解釈できなくなりました。洪水層の上下には未検出の建築物遺構が発掘されるなど、さまざまな複層状況が見て取れるようになりました。同時に存在したのは10軒内外でしょうが、遺構としてはあちこちに見られるといった状況で、層位的に建築物を峻別することは困難です。頻繁に建て替えが行なわれていたのでしょう。

集落域の中に空白部分が見えます。中央付近の地域には過去の調査で廃棄された住居跡の残骸が認められていましたが、東南寄りでは複数の住居跡の他、八本柱の掘立柱建物跡が発掘されました。居住域の南縁には水田域と区別するための区画溝が、新旧二条中央水路に接続して掘削されていました。

北側の居住域縁辺には、資料4の図に「川跡」と表示している所があります。砂利層の存在から「自

然流路」と判断されたのですが、ここでは溝状の地形が認められ、その背後は低地へと移行していて、その先の北側はふたたび微高地へと移り、また水田地帯が広がっていた（鷹ノ道遺跡）ものと推測されています。

居住域を載せる微高地の西端部分には、「森林跡」が位置していたと考えられていました。発掘では樹木の根株の下層から溝状遺構が確認され、登呂期初期の土器破片が出土しました。森林は、洪水（恐らく終末の洪水ではない）後に形成されたものと思われ、登呂期には（登呂遺跡が登呂期とその次の時期にまたがっていたとすれば）森林ではなく建物群の存在が窺えます。ちなみに昭和18年には、この位置で八本柱の高床倉庫が倒壊した状況で発掘されています。従来認識されております北側を流れる「登呂川」の支流に推定されていたものは、区画溝ではといった指摘もあります。

このように具体的な姿が徐々に明らかにされてくると従来の理解との間に精度的格差が生じてきますが、登呂博物館による調査資料の再検討作業でその差はある程度は埋めることができたと思っています。戦中・戦後の社会事情や調査技術での状況把握は困難だったでしょうから、当時の最高レベルでの理解だったと思います。今まではその理解の上に成り立ち放しとってよく、問題を先送りしてただけで検証することを怠ってきたものといっても過言ではありません。既往資料の再検討、再発掘という手段による検証によって、今や渾然一体となって癒着していたものを一つ一つ剥がしていく事が可能な段階に入ったといえましょう。

再発掘による既往の調査への検証と、従来の諸資料を評価し資料内容のレベルアップをはかる、この二つの作業を通じて新しい登呂遺跡研究を再出発させ、いわゆる「登呂学」を構築していかなければならないと考えております。

私たちはこれらの仕事を「行政」の中でやっていくのですが、確かに現在は財政的にも人材的にもかなり厳しいものがあり、状況としては絶望的です。静岡市は平成15(2003)年4月1日に清水市と合併しますが、その中で教育・文化行政の展望は見えてきません。かかる状況の対処法の一つは、行政の上層部や行政全体へ登呂遺跡をアピールしていくことであろう、すなわち、新生静岡市の中の『登呂遺跡』としてその存在感を主張していくことだと考えております。同時に、絶望的環境の中であっても先に申しました二つの作業の手を緩めるべきでない、思っております。

3. 画像資料と遺物保存

さて、余談がたいへん長くなってしまいましたが、私たちが研究の対象として目にしている資料は、現在姿のもので、発掘されてから長い時間を経過していますので、本来の姿を失っている可能性も考えられます。そこには出土資料の正確かつ客観的な情報が隠されているかも知れません。そこで資料の持っている全ての情報を呼び戻すためにも、遺物が出土した後の経年変化を出土間際と現在の写真で対比してみようと思います。

ここに用意した写真は、昭和18年出土の木製品の写真です。遺跡発見時の出土ですので、出土状況は不明です。登呂博物館に展示している木製資料の八割前後は昭和18年当時のものでして、全体として質量共に豊富な内容を持っているといえます。この18年の時が、登呂遺跡にとって如何に重要なシーンであったかが分かります。木製品はいずれも自然乾燥で、保存処理は施されておりません。

（写真1）の容器、舟形木器です。「槽」とも呼ばれていますが、どちらの写真も2点ずつ写っています。現在の写真で上の三分の一程度残っている三日月形の破片のものは、50cm程度の長さがありますが、左側部分が大きく欠けて失われております。しかし当時の写真からは、全体の様子を知ることができます。

（写真2）は何かの容器の蓋と思われるものです。昭和18年の写真では中央のもの、現代の写真では右から2番目のものです。この二つにはほとんど変化が認められず、60年間という長期間、時間の

影響を受けずに過ごしてきた資料の代表ではないでしょうか。

それから(写真3)の田下駄。三点並んで写っている写真は、昭和18年のものです。右側の田下駄が現状を撮影した写真のものと同じものです。今では二つに割れて離れて、表面も荒れてきてはいますが形態全体はよく保存されています。この資料は割れて出土した物ではない(破損-遺棄品ではない)ことに注目したいと思います。

(写真4)は板状琴です。木製品が3点並んで写っているのが昭和18年の写真で、右側のものが琴です。現在の写真と比較して大した変化は感じさせませんが、出土当時のものを見ると、絃をかける突起の部分は大きく磨耗してしまっていて、琴尻部分が湾曲して凹状になっている部分も磨耗に見えますが、かつては大きく湾曲し人工加工によるものであることが明らかで、ここに集絃機能を窺えさせるものがあります。現在では琴の下端部のくびれ部分は磨耗によるものと思えなくもないのですが、昭和18年の写真には加工痕がはっきりしてしまっていて、鴟尾の未発達の状態を感じさせます。

琴について最近北海道と福岡の大学院生の方が調査に来られたのですが、現状での観察を正確なものと判断されては大変危険と思い、この昭和18年撮影の写真もお見せして、観察に訂正を加えてもらいました。そういう意味では出土直後のこういう記録は、大変貴重なものと言えましょう。

今までの木製品には杉材であるためか極端な変形は見られませんが、広葉樹は全く違います。

(写真5)は又鋏、又鋏かもしれませんが、欒樫だったか白樫だったかちょっと記憶がはっきりしませんが、とにかく欒材です。堅い広葉樹です。これはもう変形著しいものです。とても学術的な資料として耐え得る状況にはなく、昭和18年の写真が頼りです。

この鋏ではなく横鋏と呼ばれているものの石膏模型が、本館一階の展示室に展示してありました。登呂博物館でも同じものを所蔵していますが、これは昭和18年だったか19年だったかに製作したとの記録があります。この模型資料を見ても現物は全く資料的価値が失われていることが分かります。

この横鋏の石膏模型には、写真にもみられますが、鋏身の柄穴に柄の先端部分が嵌った状態で残存した形で複製されています。柄の先端部分は加工されているので、折れて失った柄本体が鋏身に対していずれの側にあったかが分かります。それから判断すると、この鋏には柄が鈍角に装着されていたことが分かります。同じ様に鈍角着柄の横鋏は、伊豆葦山町の山木遺跡にも見られます。鈍化着柄の農具と鋭角着柄の農具では、用途も使用方法も全く違います。現状の資料には柄が残っていないので、現状の観察だけでは大変な誤りを犯してしまうこととなります。ですから、出土資料は可能な限り出土したその時の形状をさまざまな形で記録し、保存する努力を怠ってはならないと思います。

琴の観察の時にも思ったのですが、レプリカを作っておくこともいいかなとも思います。登呂遺跡出土の木製品は自然乾燥によって既に正確な情報を伝えるものは多くはないと思われませんが、少なくともこれ以上の情報の喪失を防ぐ為には現状を固定する必要があるかと思いました。その意味では現状でのレプリカ製作も、決して意味のないことではないと思ったことがあります。これには大変な手間と費用が掛かりますので、さしあたって手っ取り早いのは、映像として記録しておく、それに大場先生のように日記の形でいいのでメモを付けておく、そうしないと記憶というものは、その人自身のものであるし、しかも時間と共に薄れていくものなので、後に正確に伝えることができない場合も考えられます。ただ観察は観察する人によって対象とするものや精度などが異なるので、他の人間や後の人の使用に耐え得る表現になっていない場合もありますので、広範な使用に耐え得る客観的データの抽出を期待するのであれば、やはりレプリカによる保存も考えていいのではないのでしょうか。

4. 大場磐雄資料と登呂遺跡

それでは写真を見ていただきながら、補足的に説明をさせていただきます。

(写真6)これは大場先生が撮られたものかどうか分かりませんが、「昭和18年発見当時の状況」

という説明が付いていました。木杭があたり一帯に露出しているのが見えます。我々の発掘ではこのように杭が検出された場合、杭の折れた位置が埋没した時の生活面と解釈するのが普通です。この写真では、杭がかなりの長さで立っている状況ですので、既に少なくとも埋没した時の生活面を相当下げてしまっていることが分かります。これら杭の折れた高さが当時の生活面と考えてよいと思います。

ご覧の様に周辺には何もありません。遠くの方、静岡市の中央にある独立丘陵が見えます。この上に森がこんもりとしています。ここに小さな社があります。ここに柚木山神古墳という静岡地方最古の竪穴式石室を内部主体とする前方後円墳が築かれています。

(写真7) これは四本柱の住居跡と考えられるものです。ポールが立っているので大きさはお分かりと思いますが、柱の下に敷く礎板が見えます。1, 2, 3, 4つ目は見えませんがこの辺りだろうと思います。礎板の様子から四本柱だったことが分かります。日誌には中央に炉跡を確認しているので、床面を掘っていたこととなります。写真では炉のある床面と礎板が同レベルに写っています。柱は通常床を40~50cm程掘り込んで建てられていますので、礎板は床面より下位に位置します。ですからこの住居跡では二つの時期のものが同時に検出されたこととなります。

それから住居内部、礎板の一つに接する位置に板が縦に桶状に埋め込まれているのが見えます。輪の直径は凡そ40~50cmと思われませんが、円形の施設の様です。まるで井戸のように見えます。板はいずれもある程度の同じ高さで折れています。この折れた高さにこの施設の所属する床面を想定しますと、礎板の位置はそれより下位になりますから、これら二つの施設は同じ住居に属するものと考えてよいと思います。日誌にある炉跡は別のものということが出来ます。すなわち二つの時期の床面が存在していたということが出来ます。戦後に発掘された住居跡の全てに同様の状況が見て取れます。

一昨年の再発掘調査では、再び一部の住居跡を掘ってみましたが、礎板の切り合いがものすごく複雑に入り組んでいて、八回ほどの建て替えが推定されましたが、四つの礎板のセット抽出は困難でした。それほど建て替えが同じ位置で頻繁に行なわれていた、ということが分かりました。

もう一つ、当時の調査は工場建設による遺跡破壊の事後処理的な性格の緊急発掘だったであろうから止むを得ないと思いますが、住居跡の周囲は丁寧な調査はしていないようです。けれどこの写真にも少し写っていますが、住居跡外側に周溝が巡っていき、溝の淵には護岸のための杭が打ち並べてありました。その溝の両岸の淵に打ち並べられた杭の倒壊を防ぐため、杭の根元部分に支え横木が溝を横断する形で設置されており、しかもこの支え横木は一本で両サイドの杭を支えていました。

今回の発掘調査でもそれぞれの住居跡に周溝が掘削されていることが明らかとなりましたが、岡村さんの作った全体の概念図を一瞥すると、まるで水郷地帯を想像させるものがありました。これらの各々の周溝は有機的な関係にあって、居住域全体を視野に入れた排水溝と思われ、排水は区画溝に導かれているようでした。

(写真8) この写真は一本柱建物といわれる建造物の柱根部分です。大場先生の『楽石雑筆』に記述がありましたが、この写真が先生の撮られたものかどうかは分かりません。この柱は礎板の上に載っていますが、その礎板の脇にも別の礎板が見えます。この上にもかつては柱が載っていた訳で、建て替えのあったことが分かります。

柱を取り囲むように小さな杭の列が円形に巡っているのが見えますが、昭和18年の記録にもそうあります。『登呂・前編』付録や昭和18年の発掘を指導された上田三平先生の『科学雑誌』所収の報告などには、一本柱住居跡と紹介されていました。住居跡かどうか分かりませんが、何らかの建物であったことは、確かでしょう。

しかし、戦後の調査や今回の再発掘調査では全く確認できませんでした。写真にある通りでしたら、登呂遺跡の建築物の構成から得られる集落様相が、従来の理解と違ってきますので、ぜひとも確認しておくべき問題の一つであろうかと思えます。

(写真9)この写真は、『楽石雑筆』記載に該当する写真です。大場先生は「木柱と根株」と書かれ、「第1号の柱と称するもの、この付近北方に大木の根株9本あり。森林の一部なりしならん。次に柱の位置は次の如し。」とあり、スケッチ・メモが挿入されています。さらに「その間隔一定せず。又柱はいずれも傾斜せり。即ち西側は内側と南方へ、東側は外側と南側へ倒れたる状を示せり。」と記載されている場所です。

この写真は、私たちが第1号八本柱高床倉庫跡と呼んでいるもので、周辺には木の株がいくつか写っています。私たちが第1森林跡と呼んでいる、「西方の森林跡」と報告されている場所です。資料4の「登呂遺跡全体図」の西の端、居住地を載せる微高地の西端部分と考えられている所です。現在ではこの部分も特別史跡に指定されていますが、隣接して民家が密集しています。家の中を覗こうと思えば覗ける位置にありますので、下手に見学者を案内しようものなら、叱られそうな場所となってしまいました。今回の再発掘調査の対象地区になっていましたが、広い範囲の発掘は不可能でした。調査の結果、木の株自体は当たりませんでした。先に申した通り巨木の根を検出しまして、その下層に洪水以前の人工の溝の存在を確認しました。これらの溝は、住居跡の周溝や区画溝の性格が考えられます。即ち洪水以前には居住地だったことになるので、八本柱高床倉庫もこれに含めるとすると、「森林の中に佇む穀倉」という今までのロマンティックなイメージは崩れていくことになります。

登呂の公園には復元家屋などがいくつか建っていますが、都市公園として植栽がしてあります。復元家屋などの周囲にも大きな樹木が多く立ってしまっていて、建物に覆い被さっています。雨が降ると雨垂れが屋根の上に落ち、その部分から腐ってきまして、その状態がしばらく続くと、屋根にまるで山岳に刻まれた深い谷のように深い窪みができてしまいます。昭和18年発掘の住居跡の屋根葺代は腐り易いワラが多くを占めるといふ分析結果もあるので、森林という場所にこのような建物が建てられていたと言う従来の解釈は、変更せざるを得ないでしょう。

これらの8本の柱は、みな同じ方向に傾いています。8本の柱が同じ上部構造物に属するものであるなら、建物が倒壊する時には同一方向に傾くなどの規則性が見られます。さらに隣接して両端に挟りのある高床倉庫の壁板材が並んだ状態で発掘されました。復元倉庫のように、井籠組み構造の板壁であったことが分かります。調査日誌には、付近から収納物と思われる大量の刳殻、瓢箪の種、それに杉皮が発掘されたと、記載されています。杉皮は屋根材かとも思ったのですが、葺代としてのワラ材も出土していますので、やはり何かに使う目的で杉皮が収納されていたのだらうと考えてきました。先程、本館1階の展示室の中で復元倉庫の模型を見せて頂きました。あれは茅葺きの上を杉皮で覆ってありました。大変示唆的に思いました。

このことから、建物の復元という問題を取りましても、今後様々な可能性を吟味・検討していく必要があるかと思えます。こういう写真記録は、たとえ古いものであっても、私たちの誤った常識化された知識というものを元に戻してくれる、反省の材料になるもので、写真記録の有用性を改めて感じました。

(写真10)八本柱高床倉庫跡を発掘した写真です。8本の柱の下部が残っておりまして、建物があつた位置の横に建築用材が倒壊した状態で出土しました。棒状材がカギの手状に接続していますが、四角形に連なるようです。屋根の構造材とされています。

(写真11)これは、今お話ししました高床倉庫跡の板壁材の出土状況の写真です。写真には3枚の壁板材がきちんと並んで写っていますが、さらに2枚程並んでいたようです。5枚程度が並んでいたとしますと、今の復元倉庫の壁の高さは、これに近い高さになっています。これらの壁板材の付近から、大量の刳殻や剽悍の種、杉皮が発掘されたということです。写真ではなかなか判別が付きませんが、写っているものをさらに検討する価値はあると思えます。

(写真12)これは円形の井戸跡と言われているものです。大場先生の『楽石雑筆』に、8月8日、

先程の写真も8月8日に撮影されているのですが、「円形井戸枠側（井戸側ですね）。遺跡の西部小流の辺に有するもの。割り板を縦に用いて作れるもの。今周困破れてはじけたり。中央部の幅約50センチ上部は開きて不明なれど1.1メートルを有せり。」とあります。

登呂遺跡は静岡平野の南部に位置しています。静岡平野の中央部近くにまで北から賤機丘陵が出張ってきていて、その南端に静岡浅間神社が鎮座しています。その南側に駿府城跡が位置しています。丘陵の西側を安倍川が南下しています。安倍川はかなりの急流でして、大量の土砂を運んでいます。賤機丘陵の末端付近から安倍川は広い平野部に出ます。運ばれてきた土砂は平野部に扇状地を形成しながら堆積してきました。

水は堆積した土砂の下を流れ下って、扇状地の末端付近で地表に噴出し、湧水帯を形成しています。登呂遺跡はその湧水帯に位置しているので、頑固な井戸は必要ありませんでした。井戸の中に土が崩れ落ちるのを防ぐ程度の簡単な施設で事足りたと、考えられています。登呂の周辺地域では、今でも水が自噴しています。

ですからこの付近一帯の遺跡からは強固な作りの井戸は、発掘されません。ちょっと手を加えたような施設も、大場先生の目に留まったんですね。

（写真13）これも『楽石雑筆』に記述のある井戸跡です。前のものと同じ8月8日撮影となっていて、「井戸。方形のもの割木を縦に使用しあり。内部より弥生式土器片を拾う。」とあります。これは板材を縦に打ち並べて、四角な井戸を作ったものです。

先程の円形の井戸とこの方形の井戸という風に井戸の形が違っていますが、井戸の目的など、何らかの意味合いの相違があるのか、あるいは時期差なのか、気になるところです。いずれも弥生式土器出ているということですので、大した時間差は無さそうですが、洪水の前と後とで違いがあるものなのでしょうか。

（写真14）この写真も同じ8月8日撮影のようですが、「柵列。東方部の柵列にして、一は西方より東方に向かい蜿蜒続きある様、他は東方より反対に之を見、且つ両柵の交叉して北方へ延びゆく有様を撮影。」となっています。写真では明瞭ではありませんが、これが二列の柵列と当時呼ばれていた木杭列でしょうか。畦の両側に護岸（補強）用に杭が打ち並べてあるというものです。

この写真を大場先生の撮影なさった8月8日の「柵列」の写真だとしたのは、この写真の遠方に写っている、どの人物だったか忘れてしまいましたが、森豊先生が佐野大和先生だと仰ったのを覚えていて、佐野先生が写っているという事は、大場先生が撮影された写真だろうと思った訳です。

（写真15）これも同じです。ここに写っている人物の内の1人がそうだということです。ご覧のように幅広の板材、矢板をずっと打ち並べてある様子が写されています。

板の上端がかなりささくれだっていますが、採土の際の削られて壊されてしまっているように見えます。当時の田面はもう少し高いレベルだったのではないのでしょうか。

先程の岡村さんの調査結果で、登呂遺跡水田跡の洪水前の畦畔では矢板・杭を多用していないという見解を紹介しました。静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査した静岡市瀬名遺跡では道路建設の事前調査なので調査区は細長く、調査区の主軸に沿って弥生後期の大畔遺構を200m程の長さで発掘しています。この一続きの畦の護岸設備には、地点によって様子が大きな違いが見られました。ある場所では矢板が間断なく打ち込まれているかと思うと、別の場所では横木を当てて杭で押さえる程度であったり、全くこうした手当てのない所も見られました。

1本の畦でのこのような相違は、基盤層の地形の形状によるものという事でした。水田層を掘り下げた結果、基盤の地形が自然流路であったり谷状の窪地の所では強固な保護設備が見られ、微高地状の上層部分の畦にはそうした設備は認められなかった、とのことでした。即ち、地盤の強弱によって護岸設備の形状に相違が生じたものと言えそうです。瀬名遺跡の場合は基盤層の上層、弥生後期の時

期に地形環境の変動がなかったのですが、登呂遺跡の場合は、岡村さんの調査の結果では、地下水水位の上昇などの影響が全体に現れているとのことで、あるいはそれが水田下層部に環境変化を及ぼしているのかもしれませんが。瀬名遺跡とは状況が異なり、時間の経過と共に畦畔保護施設の形状も変わってきたとも考えられます。しかし、広い範囲での調査ではないので、基盤地形の影響による形状の相違も視野に入れて置く必要があると思います。

登呂遺跡の東名工事の事前調査（昭和40(1965)年）の頃までは、畦畔遺構と言えば矢板・杭列が必ず伴うものという神話があり、そうした先入観を持って畦畔遺構を発掘しているのに、護岸施設の施されていない畦畔遺構は見逃されている可能性があります。

さらに今回の再発掘調査で、水田域の北側と南側で小区画水田が確認され、登呂遺跡の水田も他の遺跡同様の小区画という形態をしたもので、大区画の中をさらに手畦によって小さく区画していたことが明白になりました。

（写真16）これも先生の記述に「柵樋」とあるもので、「東西の長柵一部に柵と柵との間に檜皮を敷きて樋をつくれる所あり、注目すべき施設とす。」と説明されています。写真ではどれがそうなのがよく分かりませんが、森豊先生は、この畦畔杭列に沿って長く延びている所を指しておられました。

写真には、あたり一面に土の塊が散乱した状況が写されています。戦後の調査の時にはもう少し掘り下げて掘っていますので、田圃らしい光景でしたが、発見当初はこんな状態の中での観察でしたから、明瞭に撮影することは困難だったと思われます。

（写真17）これも『楽石雑筆』に載っているものです。「木樋」となっていて、「この点余等が調査中、偶々土工の今や破壊せんとするの状を見、急ぎ之をとどめて急拠撮影せしむ。自然の大木を刳抜て樋とし、木の根株を通して斜に架せられしもの。幅約9寸、傾斜8度3分。蓋し一種の住居付属施設ならん。」と書いておられます。これは、横から見た写真です。

（写真18）これが今のを前方から見た写真です。「…まさに破壊せんとす…」と言うのは、写真左側にスコップを地面に突き刺してあるのが写っていますが、これなどがその状況を物語っているのではないかと、勝手に思っております。

（写真19）「柵側面」というのがこの写真だろうと思うのですが、「柵の並列せる有様を側面よりとりしもの。柵の構造を明かにすべし。蓋し、これが如何なる理由の下に行われしや。単なる境界か。又は土堤の如きものなりしか今後の調査を期すべし。」となっております。同様の状況の遺構は、昭和40年東名高速道路建設の事前調査の際にも発掘されています。

この時の遺構は、中央水路西側土堤の西縁を保護する杭列でした。杭列を側面から全体を見るために水田側の土を取り除いてみました。土堤の幅は2m程度あるのですが、水路側と水田側の両側に縁を保護する工作が施されていました。両側ともある程度の長さの杭を打ち並べてある、と見るのが普通ですが、よく観察してみると打ち込むために先端を尖らせている杭は僅かです。建築部材の廃材や棒状材が2次加工されることなく使われていました。このことは、打ち込んだのではなく、差し込んだことを意味していると思います。それ程軟弱な土地柄だったということになります。

水路はさらに南に延長され、旧地形の等高線に従って推測すると、海岸付近の汐入遺跡にたどり着きます。私もその遺跡の一部を発掘したことがあるのですが、その遺跡にも杭列を持つ水路遺構があり、杭を採取する時かなり強固に設えていて非常に苦労しました。登呂遺跡を始めとする一帯の弥生時代の水田は、非常に軟弱な土地を開発して開かれていたことが分かります。

（写真20）これは戦後間もなくの、昭和21(1946)年だったと思いますが、B29から撮影した写真と聞いております。登呂遺跡は約40万8千坪という広大な航空機のプロペラ工場の敷地内に位置していますが、この北側には航空機用発動機の約40万坪という広さの三菱重工業の工場敷地が広がっています。両工場とも爆撃を受けたのですが、三菱工場の爆撃写真は残っていました。住友工場の4棟の

建物の内3棟は焼け落ちています。

住友工場の爆撃写真があれば、登呂遺跡発見の際の状況が撮影されている可能性もあると思い、以前アメリカ大使館に聞いて貰ったことがあるのですが、分かりませんでした。この写真は登呂遺跡発見から3年程時間が経ってしまっていますが、水田跡の部分の西側と東側は太陽の光が反射して光って見えるので、水が溜まっている事が分かります。工場建設に当たって、遺跡をできるだけ保存しようとした意識が窺えます。

水田跡やその両側の水溜りの北側一帯が、居住域になります。工場建設の際に埋め立てられた場所で、埋没遺構はそのまま保存されていた場所と考えられます。平面的に見ると一部に切り込み状の埋め残された場所が見えます。その南に隣接する部分の再発掘前の試掘では山土が相当深部にまで及んでいて、かなりの量の土が昭和18年の調査以後採取されていたことが知られました。しかしその北側では水田跡の田面は掘り下げられてしまっていたとしても、終戦直後位までは杭・矢板はかなり残存していたと思われます。戦後の土地払い下げ後の再水田化の際、残されていた杭・矢板類は大半が取り払われて、水田跡は壊滅状態に陥ってしまったことは本当に残念です。

工場敷地の南縁に沿ってベルト状に畑地が見えますが、ここは土地の改変から免れた所で、遺構も埋没したままに残されていた訳です。現在この部分には東名高速道路が走っていて、事前の調査では遺構の保存状況が極めて良かったため大きな成果を挙げることの出来た地区です。東名高速道路は本来もう少し北側を通過することになっていたのですが、遺跡保護のため南側に迂回したのです。そうしたら一番保存状態の良いところに当たってしまったという、皮肉な結果になってしまったのです。西側から延びてきた東名高速道路は静岡インター付近で一旦南に迂回し、登呂遺跡の南端をかすめて東に向かい、有度丘陵に当たると国指定の片山廃寺跡の所から再び北カーブして建設されたのです。

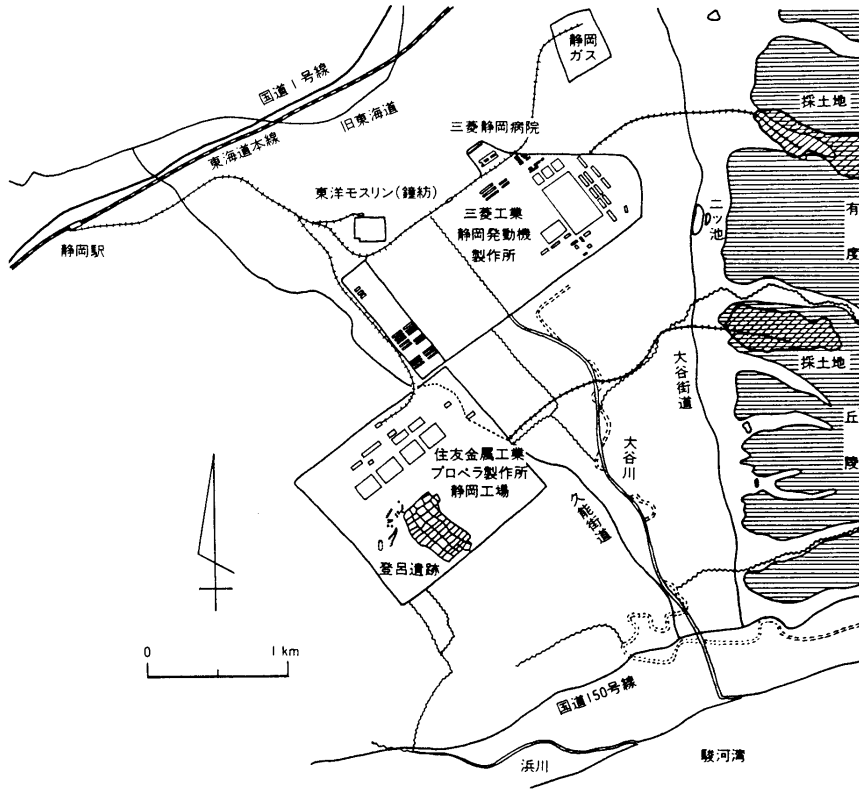
今後発掘調査が望まれる所は住宅化が急速に進んでしまったため、東名高速道路と側道間の緑地帯や付近の公園地などしか残されていませんが、なるべく多くの点を埋めて調査すれば、広域的な全体の様相が掴めるのではないかと考えております。

最近、登呂遺跡の北側を発掘調査する機会が数度ありまして、弥生時代後期の住居跡や水田跡が発掘され、興味ある成果が次々と上がってきています。私たちはこの付近一帯を鷹の道遺跡と呼んでいますが、登呂遺跡と接続していた可能性も指摘されるようになってきました。そうすると今度は登呂遺跡の南方に位置する汐入遺跡との関係の問題も出て参りました。写真の持っている情報は無限の可能性を秘めていますので、住宅化される以前の古い時期に写真を撮っていらっしゃる方が何人か居られますから、今後そのような写真を収集して分析していこうと考えております。以上で終わります。

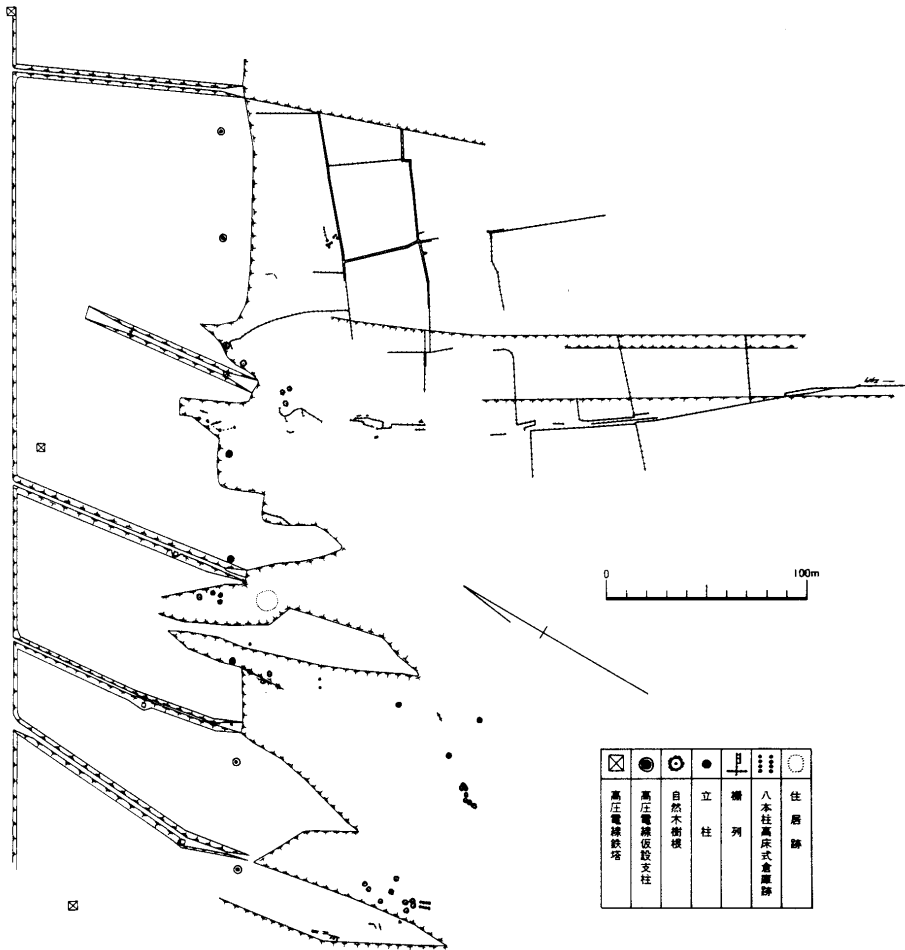
(資料1)

調査に至る経過

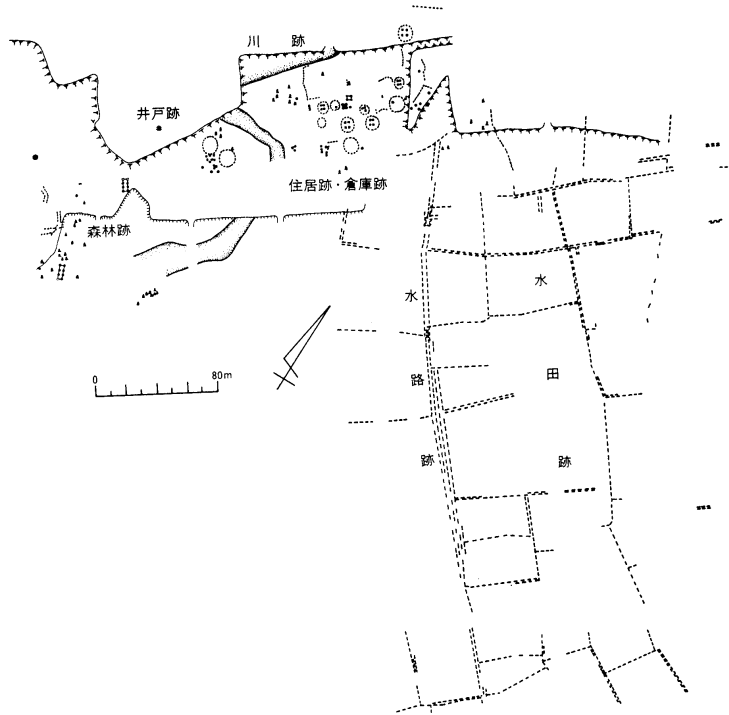
- 昭和18年 1月頃 ・軍需工場建設に伴う採土工事により、遺物の出土が知られる。
6月中旬 ・中田国民学校に出土資料を収集。安本博氏に通報。
7月 6日 ・安本博氏、採集遺物実見、遺跡踏査。注目する。
6日～11日 ・中田国民学校、現場の出土遺物採集。
7日～31日 ・安本博氏、現場の出土遺物採集。在京の研究者に通報。
10日 ・安本博氏、毎日新聞森豊氏に遺跡発見を通報。
11日 ・森豊氏、遺跡発見を報道。
・山田覚蔵県史編纂委員、中田国民学校にて収集遺物を調査。
15日 ・阿部喜之丞静岡市臨時復興局長、露出遺構・自然樹根等位置の測量を実施。
24日 ・安部樹之丞氏、平面測量及びレベル測量を実施。
以後、在京の研究者、遺跡等たびたび実地踏査。静岡県に対し遺跡の重要性や発掘調査の必要性を説く。
- 8月 2日 ・大場磐雄国大講師、夜静岡到着。
3日 ・遺跡及び出土遺物調査。夕刻帰京。
4日 ・静岡県、文部省に対し調査官派遣を依頼。
6日 ・文部省、上田三平嘱託調査官を派遣。
・大場講師、三島捨・佐野大和両氏・林写真師を伴い夜来静。
7日 ・復興局にて出土遺物を実測・撮影。
8日 ・遺跡にて、各種遺構を調査・撮影。夜帰京。
9日 ・静岡県、緊急発掘調査実施を決定。西井一孝県内政部長総指揮・上田三平氏指導・川合治栄県史蹟名勝天然記念物調査官書記担当・調査隊隊員に市内国民学校職員と静岡高校（現静岡大学）学生を当てる。
・遺跡名称を、『駿河富士見原原始農耕聚落遺蹟』に統一。
9日～12日 ・平面測量・レベル測量実施。
14日 ・安本博氏・望月勝海静岡高校教授を県史蹟名勝天然記念物臨時調査委員に委嘱、調査員とする。
16日 ・発掘調査打合せ会、開催。
・大場講師、佐野氏を派遣。佐野氏20日に帰京し、報告。
17日～29日 ・発掘調査実施。（前期調査）
21日 ・大場講師、夕刻来静。
22日 ・遺跡踏査。
23日 ・遺跡・遺物調査。県当局と打合せ。
24日 ・住友工場側と打合せ。県教育課・女子商校にて収集遺物調査。夕刻帰京。
25日 ・県、加藤忠雄県立葵文庫館長に出土遺物収集を発令。
27日 ・第1回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。
- 9月 1日 ・静岡高校木宮泰彦教授を県史蹟名勝天然記念物臨時調査委員に委嘱、調査員に加える。
2日～4日 ・追加調査。（後期調査）
15日～17日 ・再追加調査。（後期調査）
24日 ・第2回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。
11月 日 ・第3回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。
昭和19年 3月16日 ・第4回発掘調査報告書作成打合せ会、開催。
- 昭和20年 3月～7月 ・軍需工場、たびたび空襲を受ける。遺跡も被害を受けたという。
6月 日 ・静岡大空襲。県立葵文庫に収集中の出土遺物の一部、発掘調査記録類の多数、印刷中の報告書原稿等、焼失。
昭和21年12月 7日 ・遺跡再発掘調査の母体とすべく、『静岡県郷土文化研究会』を組織する。
昭和22年 3月22日 ・在京の研究者中心に、『静岡市登呂遺跡調査会』を組織する。
7月 日 ・遺跡調査打合せ会、開催。遺跡名称『登呂遺跡』の改称を正式決定。
これ以後、登呂遺跡における学際的総合学術調査が遂行されていった。



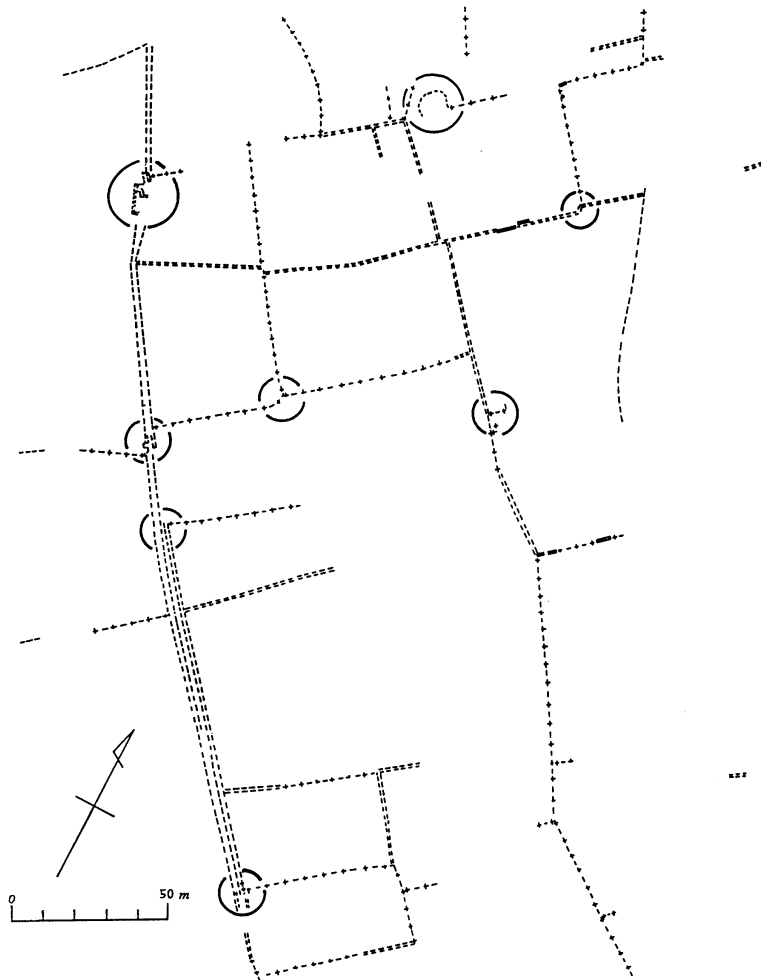
資料2



資料3



資料4



資料5

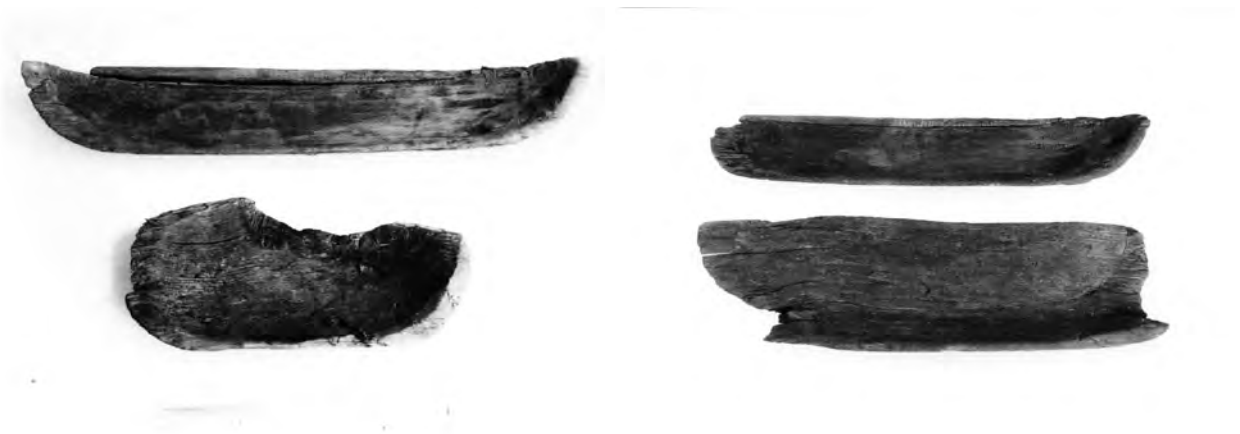


写真1 木槽 (左:昭和18年 右:現在)



写真2 蓋 (左:昭和18年 右:現在)



写真3 田下駄 (左:昭和18年 右:現在)

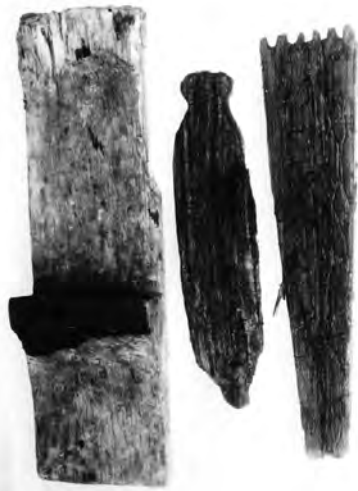


写真4 板状琴 (左:昭和18年 右:現在)



写真5 又鋏 (左:昭和18年 右:現在)



写真6 発見当時の状況



写真7 四本柱の住居跡



写真8 一本柱建物跡



写真9 第1号八本柱高床倉庫跡



写真10 八本柱高床倉庫跡



写真11 高床倉庫跡の板壁材出土状況



写真12 円形井戸跡



写真 13 井戸跡



写真 14 柵列



写真 15 柵列



写真 16 柵列



写真 17 木樋



写真 18 木樋



写真 19 柵列面

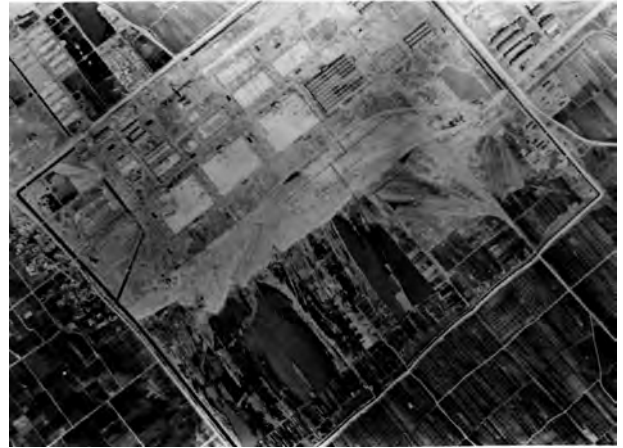


写真 20 航空写真（昭和 2 年米軍撮影）